

紀の川用水幹線水路建設に伴う
緊急発掘調査概報

昭和54年3月

和歌山県教育委員会

序

紀ノ川流域の農業用水を確保するため、農林水産省では、紀ノ川用水幹線水路事業を昭和39年度に着工いたしました。この年、橋本市隅田に所在する血繩遺跡が用水建設工事により破壊されたことから、水路予定地内の遺跡確認調査を行ない、昭和49年から同52年にかけて猪垣遺跡・北長田遺跡の発掘調査を実施し、一応、事前調査を終了し報告書を刊行いたしました。このたび、那賀郡打田町において、工事中に新たに遺跡の発見があり緊急発掘調査を実施いたしました。

ここに、その概要の報告書を作成し、一般の活用に資したく存じます。

最後に、調査に際し種々ご配慮をいただいた近畿農政局紀ノ川用水水利事業所並びに清水建設株式会社・大日本土木株式会社及び地元の方々に対し厚く謝意を表します。

昭和54年3月31日

和歌山県教育委員会

教育長 大 浦 善

例 言

1. 本調査は、紀の川用水幹線水路建設にともなう緊急発掘調査である。
2. 豊田地区・枇杷谷地区とも調査費は紀の川用水水利事業所が負担し、地元負担分については国庫補助事業として実施した。いずれも社団法人和歌山県文化財研究会に委託して発掘調査を実施した。
3. 発掘調査は、和歌山県文化財保護審議会委員の指導を受け、県文化財課技師辻林浩が担当し、文化財課技師および文化財研究会技術員がこれに協力して調査にあたった。
4. 本報告は、昭和53年度の調査概報であり辻林が執筆した。なお、遺物の実測については文化財研究会技術員武内雅人がこれにあたった。
5. 枇杷谷遺跡は『和歌山埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載されているが、豊田地区は記載されていないため、今回は豊田地区遺跡という仮称を用いた。

目 次

I 位 置	1
II 調 査	2
1. 豊 田 地 区	2
2. 豊田地区出土遺物	4
3. 枇 杷 谷 地 区	8
4. 枇杷谷地区出土遺物	10
III 小 結	11

I 位 置

豊田地区遺跡は那賀郡打田町豊田に、枇杷谷遺跡は同打田町枇杷谷に所在する。

両遺跡とも、紀ノ川北岸沿いに横たわり、府県境をなす和泉山地から南に派生した尾根が台地状を呈する部分に位置する。

豊田地区遺跡の調査対象地は、平安時代の創建と伝えられる金岡山福琳寺の西に隣接し、西方約4 kmには中世にその勢力を拡大し、天正13年の秀吉による根来攻めにより壊滅的な打撃を受けた根来寺、西南方約3 kmには西国分塔跡、同約2.5 kmには紀伊国分寺跡、東南約2 kmには奈良時代から平安時代の瓦を出土する栗島遺跡、北東方約1.5 kmには内容は不明であるが経塚山経塚、枇杷谷遺跡C地区のすぐ北側には箱式棺が出土した枇杷谷古墳（円墳？）がかって所在したといわれている。

第1図 枇杷谷遺跡および周辺遺跡



- | | | | | |
|-----------|------------|-------------|------------|------------|
| 1. 根来坊院跡 | 2. 荒田遺跡 | 3. 荊本遺跡 | 4. 高塚古墳 | 5. 西国分I遺跡 |
| 6. 西国分塔跡 | 7. 西国分II遺跡 | 8. 岡田遺跡 | 9. 土器田遺跡 | 10. 紀伊国分寺跡 |
| 11. 無名塚古墳 | 12. じょう穴古墳 | 13. 八幡塚古墳 | 14. 三味塚古墳群 | 15. 経塚山経塚 |
| 16. 栗島遺跡 | 17. チョウ塚遺跡 | 18. 東田中神社遺跡 | 19. 黒土古墳 | 20. 北勢田遺跡 |
| 21. 枇杷谷古墳 | A. 豊田地区遺跡 | B. 枇杷谷遺跡 | | |

Ⅱ 調 査

昭和53年12月7日打田町誌編さんのため、県文化財課藤井保夫技師が他の委員と福琳寺の調査に出向いたところ、同寺西側の用水建設工事現場において、瓦・土師器・瓦器が多量に出土しているのを認めると同時に尖頭器1点を採集した旨を文化財課に連絡があった。これにもとずき、紀の川用水水利事業所と協議を行なった結果、豊田地区未工事部分の延長100mの発掘調査を行なうこととなった。と同時に、枇杷谷遺跡内を水路が横断することが判明したため、この部分の延長200mもあわせて発掘調査を実施することとなった。

調査は、水路掘削幅6mに対し発掘を行なうこととしたが、工事用の耕作上、床土のすき取り結果によっては坪掘りを行ない、包含層および遺構が検出されない所は発掘を打切った。なお、工事完了後は水田に復旧するためと、本用水の工事竣工がすでに昭和54年8月11日と決定していることや各工区の期限がそれぞれ異なるため、豊田地区の東半部分・枇杷谷地区のB・C・D地区は遺構面まで重機により排土を行なった。

1. 豊田地区遺跡

今回緊急発掘調査を行なう契機となった地区で、調査対象地域となった西側はすでに工事が完了しており、未復旧部分の埋め戻し土および一部断面に包含層あるいは遺構の覆土と考えられる黒褐色土が認められた。

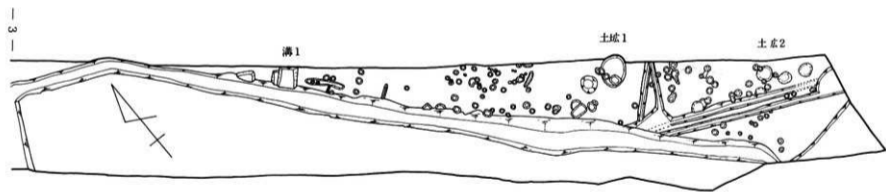
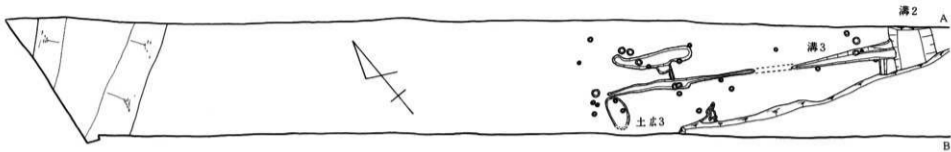
調査対象地は水田4枚にわたっていたが、南側の水田2枚の調査対象部分は、水田の床下げによりすでに遺構面は削平を受けており、遺構は検出できなかった。また、東端部分も昭和初期までこの場所が養蚕業者の宿舎となっていたため、大幅に攪乱を受けていた。なお、北側2枚の水田も遺跡を発見した時点において、耕作土、床土、包含層および地山の一部は重機によりすき取られていた。

本地区で検出した遺構は、溝・土壇・ピット群と旧地形と考えられる小さな浅い谷筋である。

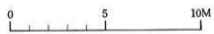
溝は計3本を検出した。溝1は、幅約100cm、深さ約40cmを計る。溝2は、幅約200cm、深さ約30cmを計る。溝3は、幅約50cm、深さ約10cmを計り、溝2によって切られている。

土壇1は、径約80cm、深さ約10cmを計る円形のもので土師器中皿と同小皿各1点が出土している。土壇2は、長径約160cm、短径約130cm、深さ約10cmを計る不正円形のものであるが、遺物の出土はなかった。土壇3は、長径約130cm、短径約90cm、深さ約7cmを計る長円形であり、瓦器塊1点が出土している。

ピット群については、調査幅が6mという限られた幅であるうえに、水田の床下げによる削平部分が大きいため、どの程度の規模の建物になり、それらがどのような方向をとるかということについては不明である。



第2図 福琳寺地区遺構図



旧地形と考えられる谷筋は、土壇3に接して設けられた南北走する水田の暗渠排水のあたりから緩傾斜を示しながら低くなってゆき、調査区西端北側でかなりの傾斜を示して高くなって行く。谷の底部において厚い部分で約6cmの遺物を含まない砂の層があり、この上に黒色粘質のやはり遺物を含まない層がある。この黒色粘質土の上層が遺物包含層である。

2. 豊田地区出土遺物

瓦器塊(第3図1・図版7-1) 復原口径15.4cm、器高5.9cmを測る。底部からゆるく内湾してのびた体部が口縁部までつづくが、体部外面は口縁下約2cmあたりから口縁部までの間に2条の強い横ナデがみられる。横ナデ以下の部分には指頭痕が顕著に認められる。内面は器壁が荒れているため十分な観察はできないが、横方向の暗文が部分的に認められ、内底面も螺旋状になると思われる暗文の痕跡らしきものが認められる。高台は断面三角形の貼り付けである。器壁は黒色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

瓦器塊(第3図2・図版7-2) 復原口径15.7cm、器高5cmを測る。底部からゆるく内湾してのびた体部が、口縁下1.5cmで口縁部が外上方に屈曲してのびている。体部外面の指頭痕は口縁付近は横ナデで調整しているが、それ以下は調整が施されず指頭痕が顕著に認められる。内面は間隔の広い横方向の平行暗文が施され、内底面には螺旋暗文が施されている。高台は断面三角形の貼り付けである。器壁外面は灰色を、内面は黒色を呈している。胎土は灰白色を呈し、焼成も良好である。

瓦器塊(第3図3・図版7-3) 復原口径14.2cm、器高4.4cmを測る。底部からゆるく内湾してのびた体部が、口縁下2cmで口縁部が外上方に屈曲してのびている。外面は屈曲部から口縁までは横ナデの調整を行なっているが、それ以下は指頭痕がかすかに残っている。内面には横方向の平行暗文が丁寧に施されている。内底面の残りが悪いのでよく観察できないが、螺旋暗文が施されていたものと思われる。口縁部内面には、ヘラ先による沈線が1条めぐらされている。高台は貼り付けで、断面長方形を呈する。器壁は内外面とも灰黒色を呈し、やや軟質である。

瓦器小塊(第3図4・図版7-4) 復原口径8cm、器高2.7cmを測る。中心より右廻りに指で引き上げて作ったもので、内面に引き上げの痕跡が明瞭に残っている。底部からゆるく内湾してのびた体部が、口縁下1.5cmで口縁部が外上方に強く屈曲してのびている。口縁部内面は横ナデにより調整され、それ以下は横方向の平行暗文が施されている。外面については、口縁部は横ナデの調整を受けているが指頭痕が残り、それ以下は調整を受けていないため指頭痕が顕著である。高台は貼り付けで、断面三角形を呈する。色調は黒色を呈し、やや軟質である。

瓦器小塊(第3図5・図版7-6) 復原口径6.6cm、器高2.1cmを測る。底部からゆるく内湾してのびた体部が、口縁下1.3cmで口縁部が外上方に屈曲してのびている。内面は一応横ナデを行なって仕上げているが、指頭痕と考えられる凹凸が残っている。外面は口縁部にのみ横ナデの調整

が施されている。高台は貼り付けで、断面三角形を呈する。色調は外面は黒色、内面は灰褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

瓦器小壺（第3図6・図版7-5） 復原口径6.2cm、器高2cmを測る。底部からゆるく内湾してのびた体部が、口縁下1.2cmで口縁部が外上方に屈曲してのびている。内外面とも指頭痕が残らないほど丁寧な横ナデが施されている。高台は貼り付けで、断面三角形を呈する。色調は外面は灰褐色、内面は黒色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

瓦器小皿（第3図7・図版7-7） 口径8.4cm、器高1.9cmを測る。口縁部は横ナデで仕上げられ、内底面も丁寧にナデで仕上げられているが、外底面には指頭痕が顕著に残る。

瓦器小皿（第3図8・図版7-8） 復原口径8.6cm、器高1.5cmを測る。外底面には指頭痕が残る、口縁部および外底面周は横ナデで仕上げられている。

瓦器小皿（第3図9・図版7-9） 口径8.6cm、器高1.4cmを測る。外底面には指頭痕が残る、口縁部は横ナデで仕上げられている。

土師器中皿（第3図10・図版7-10） 復原口径12.6cmを測る。内外面とも横ナデにより丁寧に仕上げている。

土師器中皿（第3図11・図版7-11） 復原口径15cm、器高3.3cmを測る。底部からゆるく外上方に体部がのび、口縁はまっすぐおさめてある。内面および口縁外面は横ナデで仕上げているが、体部下半および外底面には指頭痕が残る。

土師器中皿（第3図12・図版7-12） 復原口径12cm、器高3cmを測る。底部からゆるく外上方に体部がのび、口縁下1.7cmで口縁部が外上方に屈曲してのびる。口縁部外面は横ナデによる仕上げを行なっているが、体部外面下半および外底面には指頭痕が残る。内面はナデで仕上げているが、外面同様指頭痕が残る。

土師器小皿（第3図13・図版7-13） 口径8cm、器高1.3cmを測る。平底で体部は外上方に短くのび、口縁端部を丸くおさめている。外底面には指頭痕が残る。内面および体部外面中位には強いナデが行なわれている。粘土板成形。

土師器小皿（第3図14・図版7-14） 口径8.3cm、器高1.5cmを測る。平底で体部は外上方に短くのび、口縁端部を丸くおさめている。外底面には指頭痕が残るが、外縁にヘラ削りがみられる。内面および体部外面中位には強いナデが行なわれている。粘土板成形。

土師器小皿（第3図15・図版7-15） 口径8.9cm器高1.7cmを測る。底部からゆるやかに体部が外上方にのび、口縁下1cmの所で口縁部が屈曲してのびている。器面が内外面とも荒れているため調整痕は不明であるが、外底面には2列の指頭痕が残る。粘土板成形。

瓦質羽釜（第3図19・図版9-2） 復原口径18.3cmを測り、約1cmの断面三角形を呈するひれが外方に張り出す。口縁部は内傾し横ナデで仕上げられているが、ひれを貼り付けた際の指頭痕が内外面に残る。

土師器場（第3図20・図版9-1） 小片であるが、復原口径26.8cmを測る。口縁は体部からく字状に開き、先端は内側に折り曲げられているがナデにより丸く仕上げられている。体部内面はハケによる調整が行なわれている。

須恵質摺鉢（第3図21・図版9-3） 復原口径31cmを測る。須恵質であるが、作りは瓦質摺鉢そのものである。口縁下端がやや垂下気味である。体部外面は横ナデの後ヘラ削りを行ない、内面は丁寧に横ナデされたのち、単位10本の摺目が施されている。

須恵質こね鉢（第3図22・図版9-5） 復原口径27.9cmを測る。内外面とも横ナデで仕上げているが、粘土の巻き上げ痕が明瞭である。片口部は2本の指によって引き出されたものと考えられる。また、片口部両端の凹みは、片口部を引き出す際に押えた指の痕と思われる。

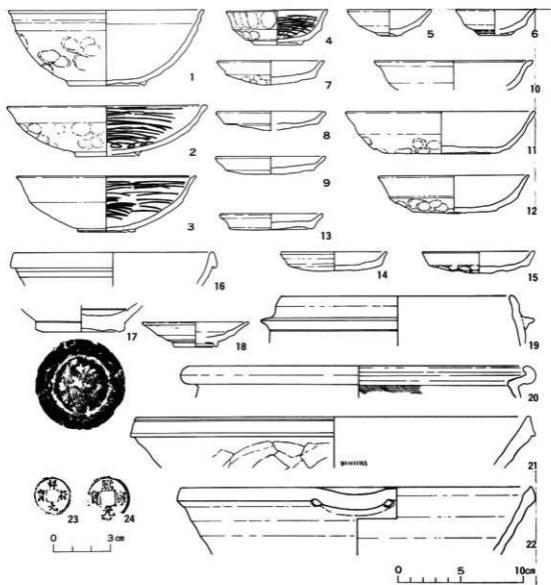
青磁皿（図版8-1） 2片とも見込みに劃花文をもつ皿で、左側のものは龍泉窯の製品と考えられ、淡い灰緑色の釉がかかっている。銜部はヘラ削りにより、若干上げ底となっている。右側のものは同安窯の製品と考えられ、灰緑色の釉がかかっている。

青磁碗（図版8-2・3・4） 内面に劃花文をもつもの（2）と、片切り彫りの蓮弁文をもつもの（3）、線彫りの蓮弁文をもつもの（4右列中・下段）、無文のもの（4）がある。無文のものには、まっすぐにおさめた口縁をもつものと、（4一下段左側2点）、やや外反り気味で口縁端部がやや厚みをますもの（4一上段）とがある。

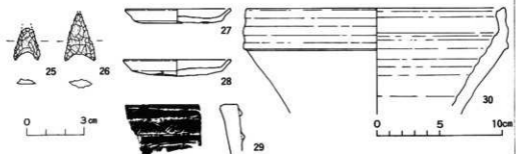
白磁碗（第3図16・図版8-5） 第4図16（図版8-5上段左端）は、口縁部を折り返して玉縁状にしたもので、緑色がかった灰白色の釉がかかる。同様の玉縁状口縁のものがもう1点（図版8-5上段左から2番目）出土しているが、これは玉縁状口縁の中心に稜を有し、口縁下5cmのところから露胎となっている。これら玉縁状口縁の碗とは別に、口縁端が外方に張り出したもの（図版8-5上段右から2番目）とがある。

玉縁状口縁をもつ碗の底部として第4図17（図版8-7）がある。これは底部から体部への移行点にヘラ先による沈線がある。高台は削り出しであり、外底部の削り出しは畳付け部から1～2mmと非常に浅く、畳付け部の端部を面取りしてある。また、外底部の中心を扇形に削り取っている。釉は緑色がかった灰白色を呈し、内面は全体にかかっているが、現存外面は露胎である。

白磁小皿 高台を有するもの（第3図18・図版8-6）と高台が無いもの（図版8-5下段中央）とがある。前者は、復原口径8.2cm、器高2cmを測り、底部から直線的に外上方に体部がのび、口縁はまっすぐにおさめている。体部外面はヘラ削りが行なわれ、高台は削り出しである。釉は緑色がかった灰白色を呈し、外面は口縁部近くにだけかかっている。内面は、施釉後体部中心から下方を掻き取っている。後者は、見込み外周にあたる部分にヘラ先による沈線がめぐらされ、底部はヘラ削りにより、極僅かではあるが上げ底となっている。



第3图 豊田地区 出土遺物実測図



第3图 枇杷谷地区 出土遺物

3. 枇杷谷地区

豊田地区の西方約300mに位置し、小川により台地は分断されている。

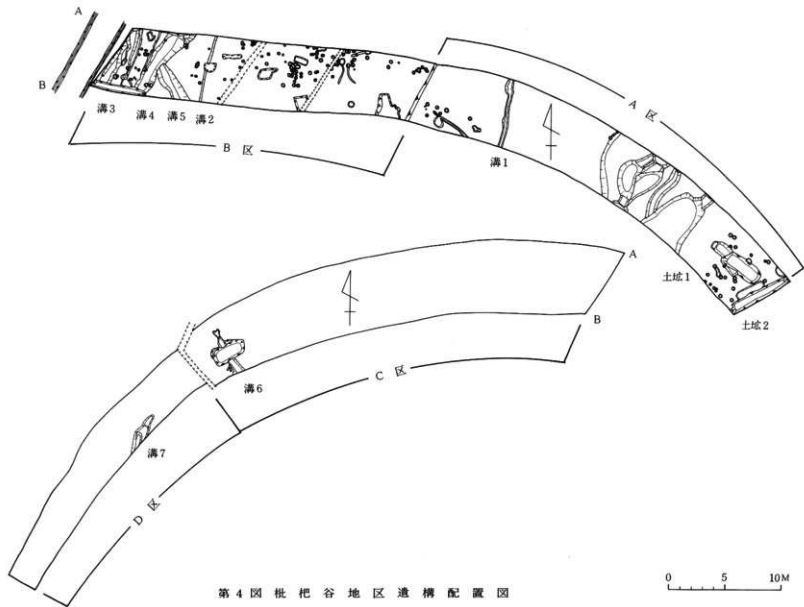
当地区は春日川の支流と小川に挟まれた地点で、延長220m、幅6mに対し発掘調査を行なった。なお、調査区が東西に長いため、東より水田ごとにAからEまでの地区仮称を使用した。

用水建設工事は、工事完了後水田として原状に復旧するため、耕作土、床土は別々に除去するという作業が必要であるため、耕作土・床土の除去は紀の川用水利事業所の工事として実施することとし、床土除去の時点から立ち合い調査を行なった。その結果、A地区では遺物包含層を検出したため、この上面で工事を中止した。B地区は水田の床下げにより、すでに地山まで削平を受けていたため、地山面まで工を行なった。C・D地区もB地区同様地山面まで削平を受けていたため、地山面まで掘り下げた。E地区は台地状の尾根であるため、最も残りがいいと判断し、耕作土除去後2×2mの坪掘りを5ヶ所行なったが、尾根の高い部分を削平しその土で低い部分を嵩上げしただけであり、包含層および遺構を検出できなかったため、坪掘りだけにとどめた。

A地区 東端部で中世の遺物包含層が小川によって削られていることが判明したと同時に、伊万里焼を含む盛土により部分的に川岸を埋めていることも判明した。遺構としては、東端で検出した長辺約2.6m、短辺約0.7cmを計る土壇1、長辺約3.2m・短辺約1.2mを計る土壇2、およびピット群と中央部の落ち込み、西端部の幅約40cmの溝1がある。

B地区 台地状の尾根部分にあたり、その西端部で中世の水田灌漑用と考えられる溝3・4を検出した。いずれも下限は室町時代になるものと考えられる。また、この溝に切られた黒色の覆土をもつ溝5があるが、遺物の出土がないため時期は不明である。溝2についても同様である。これらの溝以外の遺構としてはピット群があり、大半は中世のものと考えられるが、そのいくつかからはサヌカイトの剥片が検出されているところから、石鏃の出土と考え合せ縄文時代のものになる可能性がある。

C・D地区 両地区とも谷筋にあたり、溝各1条づつを検出した。いずれも遺物の出土がないため時期を決定できないが、江戸時代の水田に伴う溝であろうと考えられる。



第4图 柘把谷地区遗构配置图

4. 枇杷谷地区出土遺物

石鏃（第3図25・26、図版10-7・8） 2本とも背の高い2等辺三角形を呈している。25は片面に第1次剥離面を残しているが、他面は調整剥離を行なっている。えぐりは4mmであるが、小さいため逆刺は長くみえる。26は両面共調整剥離が行なわれている。えぐりは3mmであるが、大きいため逆刺は短くみえる。2本とも薄手のつくりで、縄文時代のものと考えられる。

瓦器小皿（第3図27・図版10-9） 復原口径8.2cm、器高1.1cmを測る。外底面には顕著に指頭痕が残るが、口縁部内外面および内底面はナデで仕上げている。

瓦器小皿（第3図28・図版10-10） 復原口径8.5cm、器高1.3cmを測る。外底面中央部に指頭痕が残るが、外周は手持ちのヘラ削りが行なわれている。口縁部および内底面はナデで仕上げられている。

青磁（図版10-11） 口縁部の破片は上段左側だけであるが、口縁端部が外反りである。左側下段のものは香炉につく獣足である。右側上下は碗の破片である。4片とも明代のものである。

備前焼摺鉢（第3図30・図版9-9） 復原口径は20cm強になるものと思われる。上方に拡張された口縁に、ゆるい2条の凹線をめぐらす。粘土紐を巻き上げ成形したのち、内外面に横ナデの調整を行なっている。摺目は小破片のため、現物に残っていなかったので不明である。

火鉢（第3図29・図版10-1） 復原口径約44cmを測る。口縁端部は幅1.2cmの厚みをもち、ヘラ磨きにより平滑に仕上げられている。口縁下0.6cmと2.5cmのところに、断面半円形の2条の貼り付け凸帯があり、その間に2.5cmの間隔をおいてスタンプによる文様が施されている。貼り付け凸帯の上縁はナデによる仕上げであるが、下縁はヘラ先で押えている。

Ⅲ 小 結

豊田地区の調査区すぐ東に隣接する金岡山福琳寺は、『紀伊続風土記』によれば「…寺伝にいう後一条院寛仁2年七堂伽藍を建立し給いて勅願寺と定め給う莊田32町5段を寄付し給い堂塔大に備わり…中略…壮麗なりしに天正13年の兵火に盡く灰燼となり寛永以後再建して今の形となれり…中略…古の四至は方八町といひ伝う今の四至は60間に50間…」と記されており、天正の兵火を免れたとされる古文書の中に建武2年(1335年)の福琳寺俗別当補任状1通があることから、南北朝までは確実に遡ることができる。また、今回の調査により、暗渠排水に使用していたとはいえ、平安時代後期の軒平瓦や丸瓦の出土からみて、『紀伊続風土記』にみられるように平安時代まで遡る可能性が与えられたものと考えられる。寺域については、現福琳寺周辺には伽藍に関連すると考えられる小字名が散見されるところから、方八町とまではいわないまでも、かなりの規模をもつ寺であったと考えられ、今回の調査対象地は福琳寺の旧寺城内と考えるのが妥当であろう。しかし、宗教的色彩の強い遺物については何ら検出されなかったが、それは限られた地区の非常に狭い部分であったためと考えられ、今後調査を行なう機会があれば明らかにされるものと思われる。

枇杷谷地区は、古くより雨の翌日にはこの周辺の畑で石鏝が採集されることで知られていた土地である。しかし、今回の調査では石鏝2点とサヌカイトの剥片が出土しただけで、石鏝に伴う他の遺物は検出されなかった。ただ、前述したようにB区で検出したピット群のいくつかからサヌカイトの剥片が出土しているところから、これらは縄文時代の遺構である可能性が大きい。また、ピット群の中に見られる幅の狭い弧状を呈する溝状の遺構は、出土遺物はなかったが同時代住居跡の壁溝になる可能性が考えられる。なお、縄文時代の遺跡があるとすれば、その主体は調査地点より北方のもう一段高い台地状の尾根部にあると考えられる。

A・B両区の中世と考えられるピット群がどのような性格のものであるかは不明であるが、山麓から南に傾斜を示し、なおかつ東の小川に向かって傾斜を示す緩傾斜面にこのような遺構群が存在することは、紀ノ川北岸において同様の地形をみせる場所に遺跡がノーマークであることを考えるとき、和歌山市西庄遺跡を含め、今後に大きな指標を与えるものとなろう。



豊田地区遠影



豊田地区東半(西より)



豊田地区 西半東側（西より）



豊田地区 西半西側（東より）



枇把谷地区遠影



枇把谷A地区全影(西より)



枇杷谷A地区東端部 ピット群（東より）



枇杷谷A地区全影（東より）



枇杷谷B地区全影

枇杷谷B地区
西端溝





枇杷谷C地区全影



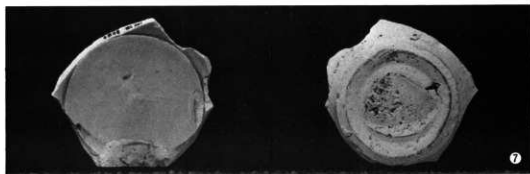
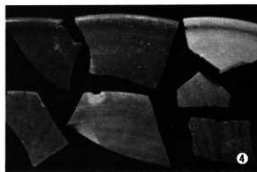
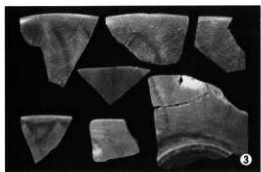
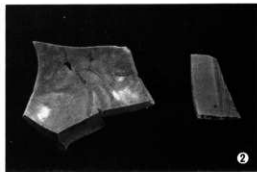
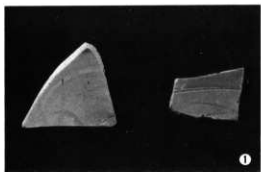
枇杷谷D地区 溝



1～3 瓦器碗 4～6 瓦器小碗 7～9 瓦器小皿 10～12 土師器中皿

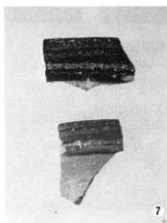
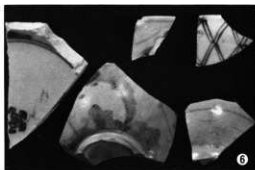
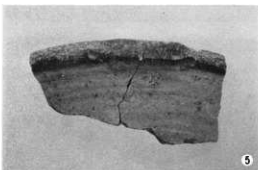
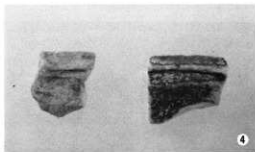
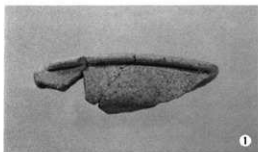
13～15 土師器小皿

(豊田地区)

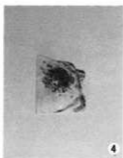
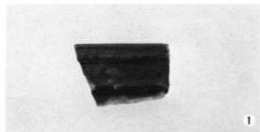


1~4 中国製青磁 5~7 中国製白磁

(豊田地区)



1 土師器鍋 2 瓦製羽釜 3 須恵貫摺鉢 4 瓦貫摺鉢 5 須恵貫こね鉢 6 伊万里焼
7 備前焼摺鉢 8 唐津焼 (以上 豊田地区) 9 備前焼摺鉢 (枇杷谷地区)



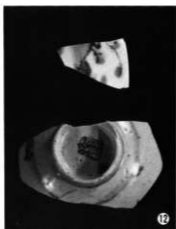
1 瓦製火舎 (枇杷谷地区)

2 軒平瓦 (豊田地区)

3. 4 砥石 (豊田地区)

5 祥符元宝 (豊田地区)

6 熙寧元宝 (豊田地区)



7. 8 石 礮 (枇杷谷地区)

9. 10 瓦器小皿 (枇杷谷地区)

11 中国製青磁 (枇杷谷地区)

12 伊万里烧染付 (枇杷谷地区)

13 美濃・瀬戸系灰釉及び鉄袖 (豊田地区)

昭和54年3月31日発行

紀の川用水幹線水路建設に伴う
緊急発掘調査概報

発行 和歌山県教育委員会 文化財課
和歌山市小松原通り1の1

印刷所 邦 上 印 刷
和歌山市黒田108-5